

# 川崎正悦先生の想いで

藤本義昭

川崎正悦先生が亡くなられてからかれこれ16年にもなるが、植物同好の志が集まると話題になることが多い。それだけ兵庫県の植物仲間と与えた影響は大きいものがある。軽妙洒落な語り口、飄々とした風貌、無欲であるが自然に対しての強い探究心がそうさせたものであろう。

先生の灘中学の教え子 寺沢 遼氏により、先生の勤務歴、山行歴、著作、牧野富太郎先生との交遊録を始め川崎先生の面目躍如とした記録や多くの方々の想いでの記事を収めた「川崎正悦先生 志のび草」が1979年に発表されている。今更私ごときものが川崎先生の想いでなど書く資格もないものと思っている。しかし、平畑会長からたって乞われ、駄文をしたためることにする。

誰でもそうであるが、川崎先生との出逢いは矢張り植物採集である。採集に同行したとき、先生の軽妙な語り口と博学さ、親しみやすい人となりに惹かれたものである。こうした出逢いの中で、印象に残っている事柄を少し記してみる。

1950年代には宍粟郡波賀町音水や赤西、氷ノ山に魅せられ、年に数回は採集に出かけていた。丁度この頃に京都大学の田川基二先生、川崎先生と同行し、赤西溪谷の林道沿いに入り、中の営林署の宿舎に泊めてもらったことがある。そのとき、林道沿いにはマムシがぞろぞろいたものである。このマムシを見つけ次第捕まえ、皮を剥ぎ棒の先に巻きつけ、背中のリュックに挿し採集を続けた。宿舎では持参の酒と、採集したマムシを焼き酒の肴にした。マムシは骨に肉がこびり付いたようなものでうまいとはいえないなどと言いながら談論風発。明日は元気百倍だと悦にいった。

1961年に上郡町の西芳院で一泊し採集会を行ったとき、出された食事が妙なるほうに話がはずみ、食好会を作ることになり、以来毎月第一月曜日に各自が調理した食べ物を持参し食べ、雑談をするような会ができた。先生はそのとき山で採集された木の実を漬けた果実酒をよく持参されたものである。

1964年に這松行脚を計画され、深田久弥氏の「日本百名山」にしたがい北から順次毎年出かけると宣言。そしてその手初めに礼文、利尻岳に登ることになった。そのとき同行したのが私と現上郡高校の真殿氏である。

礼文島では礼文岳へ登ることは勿論、そのあと桃岩へ

も出かけた。この桃岩が大変な災難に出くわすことになった。その日は大変な雨風でヤッケに身を包み、這松の中に入られたところ、突然現れた屈強な男性二人に腕を掴まれ引きずられていくではないか。私は驚いて駆け寄り苦情を言うと「採集禁止のところを荒らしている現行犯だ」と、居丈高に居直る始末。そこで私の採集許可の腕章を示し、この方も腕章を付けているからとヤッケを捲り示し釈放。「腕章は見えるように付けてください」と今度は丁寧な言われ、「雨風が強いから充分気をつけるように」と事は収まった。

翌日は快晴となり、川崎先生と二人で桃岩の下の海岸を採集。打ち上げられた根つきの約5mもある昆布を拾う。これこそ本当の利尻昆布だと根元から畳みリュックに入れる。またここでは地元の郵便局の方々がバーベキューをしていた。丁度昼時、腹の虫も鳴くころ、川崎先生が名刺（俗名 川崎正悦 雅号 間酌一醉 戒名 這松院愛酒恋山居士 裏戒名 頭鈍貧腕慢性懐淋居士）を片手にこれらの人のところに寄り話しかける。名刺を見た彼らが驚き、笑い仲間に入りなさいということでご馳走になる。話しが弾み酒も沢山頂きご機嫌になり午後の採集は中止。そのとき奇病エヒのcockスの感染経路につきいろいろ教えられた。北狐が仲立ちをし、その糞便に寄生虫の卵があり危険なこと、したがって山や谷川の水は汚染されている疑いがあるから飲んではいけないこと、感染すると死ぬまで寄生虫は体内に残り苦しむことなど聞かされる。

宿の部屋では持参のロープを張り昆布を干す。それからは毎日重い昆布を下げ旅行。宿に着くたびにロープを張り、昆布干し。

利尻島では登山の下見を兼ね麓を先ず採集。宿に帰る前に酒屋を覗くと地酒「利尻」というのが目に付く。早速四合瓶を四本求め宿へ。風呂に入るとき二本を抱えて入り暖める。宿には銚子を一人一本づつ頼み、後は風呂で爛した酒を酌み交わす。そのとき採集物とラベルを丁寧にはがしノートに挟み込む。行くところ行くところ地酒を求め、風呂で爛をして飲むこのうまさ。

利尻岳登山は朝五時出発。下見をした麓は急ぎ足で過ぎ、途中からゆっくりゆっくり登る。100m高度があがるたびに休憩。後から来た学生に追い越され、またその

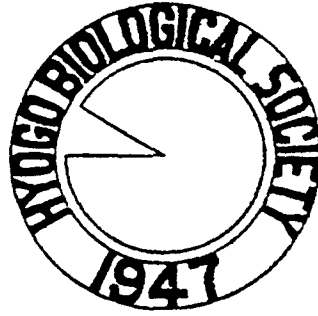
## シンボルマーク

当 津 隆

30周年の記念事業の企画が進むなかで、学会のシンボルマークが話題にのぼってきた。選定委員長となった私は民主的運営の伝統を尊重して、応募規定を決めて募り、氏名を伏しての審議の結果、理事会の推した作品は、何と私の応募したデザインであった。50周年を迎えたいま、

あらためて、制作者である私の思い出を記しておく。

由緒ある博物学会を礎に再出発した歴史を表現するために、1947を必須条件と考えた。自然に親しみ、草木を愛し、小さな



虫のいのちをいつくしむ人たちの集まりを刻み込みたい。豪壮な岩礁に変化を極める日本海、荒潮の太平洋の太平洋に連なる瀬戸の内海、この二つの海を吹き抜けていく風とともに旅をする但馬をめぐる雪の山々、水清らかな音水溪谷、沃野播州からひろがる内陸地帯、東にのびる六甲山系、野趣豊かな丹波路、南国情緒にみちた淡路島、沼島などをめぐりながら、シンボルになる決めてのないまま締め切りの前夜を迎えた。結局、いまのマークに落ちついた。30周年に因んで30度の開度にした。節ぶしに広げていく考えもあったが、制定の年を示すことにして踏襲している。開き具合は蛙のイメージとダブらせていただきたい。また、割れ目を上にするとう植物の双葉、下に向けると動物の後ろ姿と見るユーモアを感じとっていただければ幸いである。

総会や研究会はいうまでもなく、理事会などの役員会にも手製の旗を飾ってきたが、いまはどうなっているのだろうか。感謝状や表彰状にもお馴染みのマークとして伝え続けてほしいと願っている。

(第七代会長)

学生が頂上をきわめ下山するのに出会う。昼前から雨が降り始め風も出て来る。やむなく途中の山小屋で休憩。雨風が強くなり、先生はここで待つことにし、私一人で頂上を目指す。頂上でリシカニツリなどを採集。先生のため這松をとる。後から来た学生に雨の中で証拠の記念写真を撮ってもらう。

採集許可証は、川崎先生の教え子が林務局に勤めていたので貰えたものである。今となっては礼文、利尻での採集は不可能である。当時採集したレブンアツモリ、レブンソウなどは全て虫害を受け無くなったが、僅かイネ科植物だけが残っている。惜しいことしたものである。

1968年には佐々木誠太郎氏のお世話で、岩手県平館の彼の奥さんの実家に泊まり、岩木山へ登った。このとき私達のほかに先生のお弟子さんともいうべき女性たち五人も同行し大変賑やかな登山行であった。このときの想いでは、頂上から降りるとき道を迷い雪渓を降りたことである。滑るのでそろそろ進むが、どうしても先生は遅れがち。若いものたちで先生のリュックを持つ。しかし最後は先生が雪渓の上に腰をおろし、滑るように下る。これでは冷えてしまうので心配するが、先生は笑いながら「この方が転ばなくてよい」と。冷たい雪渓を進むこと2時間あまり。その夜はさすがの先生もこたえたように熱めの風呂に入り早々にやすまれた。

このように、あちこちの登山で、先生からいろいろ教えて頂き、またお宅にもお邪魔したものである。這松仙人を自称された先生は、仙人になりきるためと種子から育てた這松の盆栽を栽培、また這松の色紙に書かれていた。色紙は一千枚を目標に、書かれるたびに番号を書きこみ、来られた方々に差し上げていた。色紙は這松だけでなく酒器、花と多種多様であり、これらの全てに俳句や和歌、軽妙な語句が書き込まれていた。こうした色紙も多数頂き、四季折々に額に入れ先生を偲んでいる。

「最後は白馬山頂にたち、ピッケルをかざし落雷に打たれ成仏するのだ。俺の最後はお前も一緒に来て立ち合え。」とよく言われた。私は「わかりました。」と答えていたものだ。それが念願を果たせず早く亡くなられたことは、先生にとっては心残りだったのではと思っている。その当時の名刺に次のような文言が書かれていた。「川崎正悦 1984年8月好日91才にて白馬山頂に於いて雷死を念願 戒名 親草院愛酒恋山居士」

先生は「変わっているのは俺でなく、ほかのものが変わっているのだ。」と言われたことがある。私もそう思っている。そのような人間は私だけでなく、私の周りには何人かいる。軽妙であり、洒脱な先生であるが、個性の強い方であった。それだけにいつまでも人の心に残るのだろう。(Oct.1996.)